

474

特241

294

露国極東戦備

治著

1.7.18

10セ



3

0011209-000

特241-294

露国極東戦備を探る

小林知治・著

政道社

昭和11

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月15付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

474

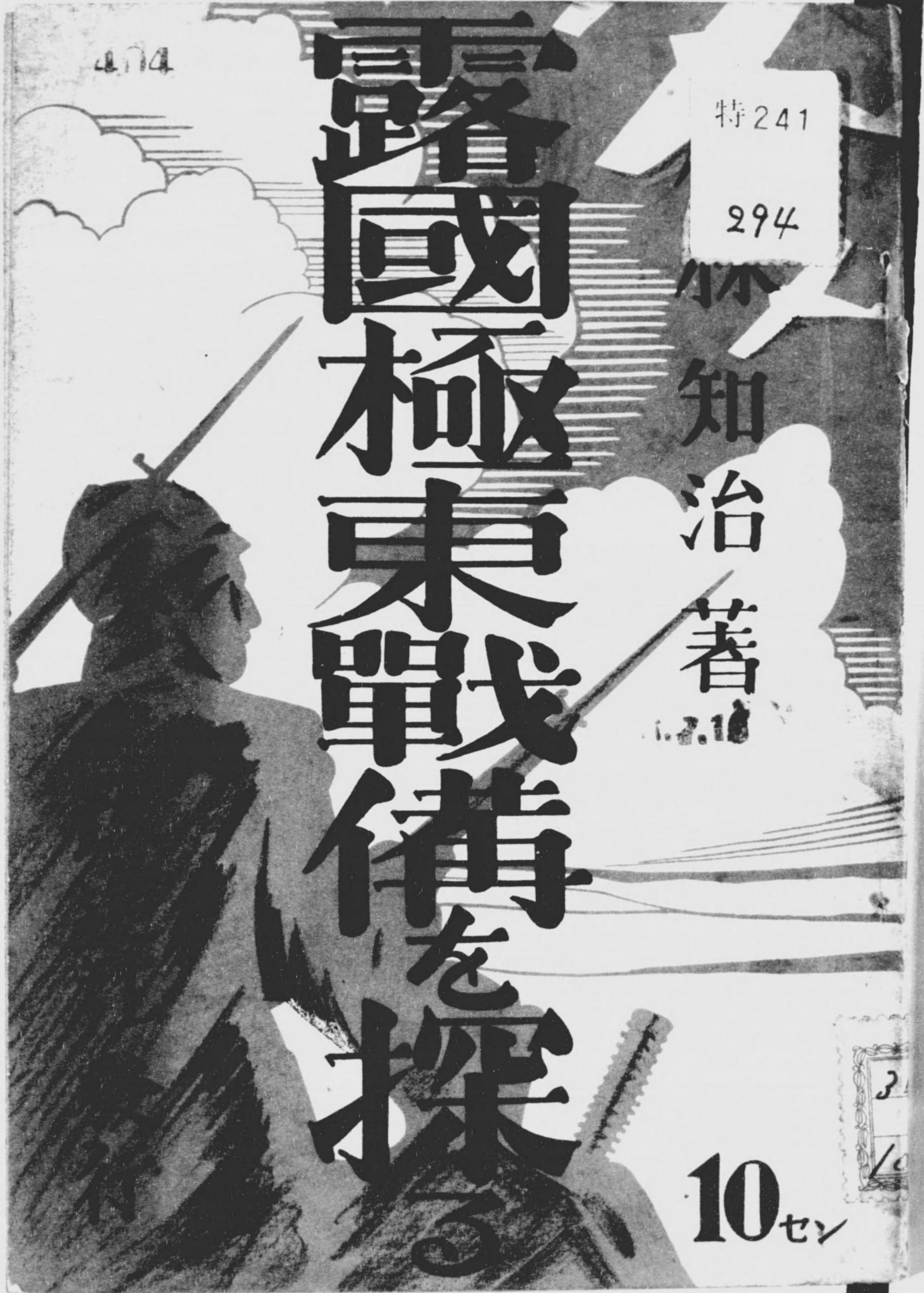
特241

294

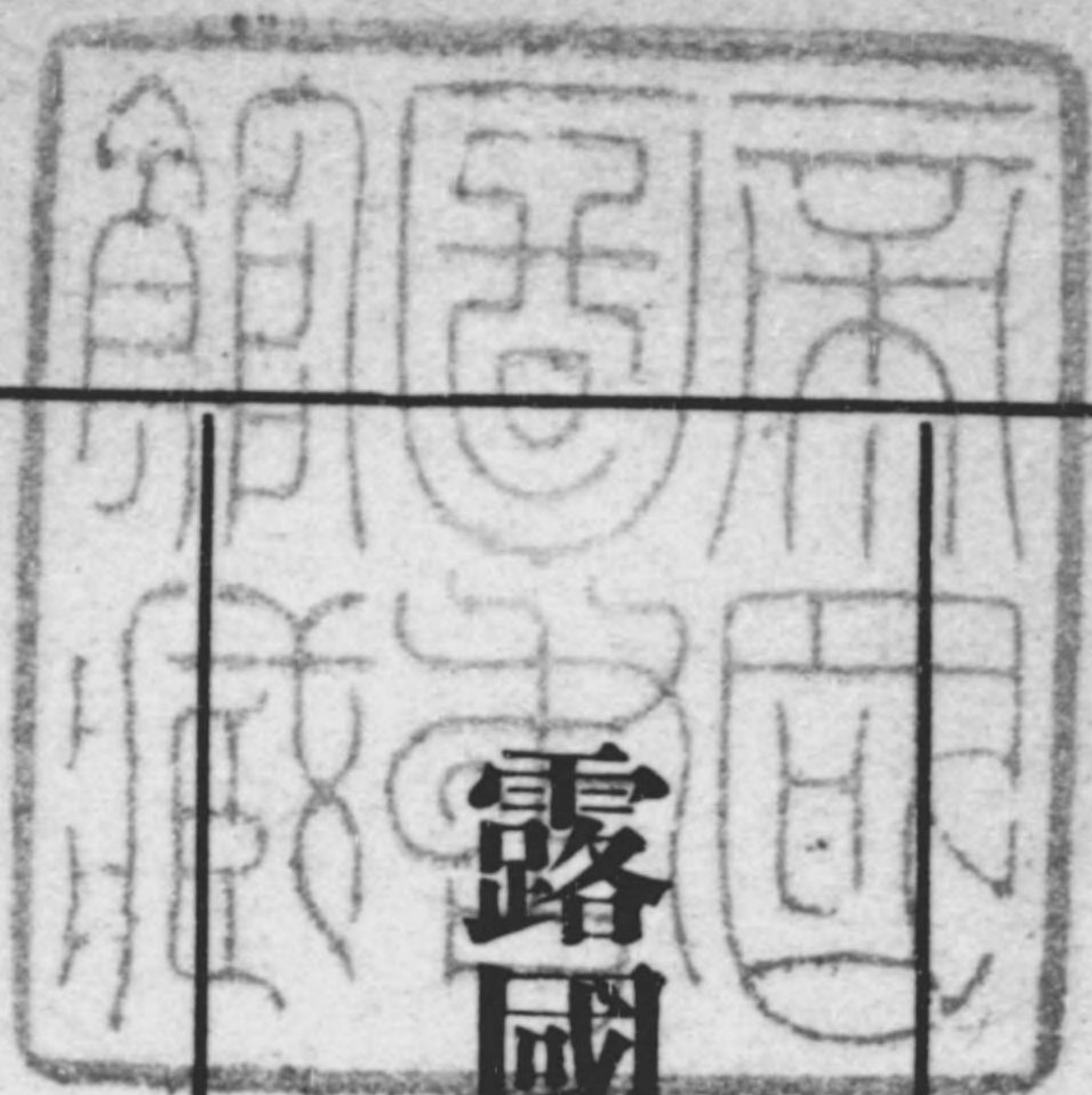
不知治著

露國極東單備を採る

10セソ



特241
294



小林知治著

露國極東戰備を探る

東京政道社版



本書は、去る五月初めより約二ヶ月間に亙り、北支・滿蒙の調査に出張された小林知治氏に、我社が特に委嘱して餘す所なく、露國極東戦備の状況を探つて來て戴いた、その實地報告書であつて、決して從來有り來りの一時的・賣名的に机上で、でつち上げたキワモノとは全然異つて、一言一句實際に則し、事實に基いたものである。一觸即發の危機を孕む滿ソ國境を繞ぐる。露國極東戦備の現状を説いた貴重な文献である。我社が茲に本書を大なる責任と誇りとを以て公刊する所以である。

目次

風雲の満ソ國境……………	三	ソ聯の外交政策……………	三二
怖るべき赤軍の脅威……………	五	東部國境の配備狀況……………	三三
革新途上の赤軍陣容……………	七	東寧と綏芬河のトーチカ……………	三五
世界の脅威赤軍の特色……………	九	黒龍江沿岸を探る……………	三七
赤軍の數字的內容……………	一一	飛行機の重要根據地……………	三八
機械化兵備の擴大……………	一三	發展途上の極東海軍……………	三〇
ソヴェートの對日策戰……………	一五	極東海軍の將來……………	三二
超重爆撃機の空襲……………	一七	外蒙赤軍の活躍……………	三五
化學裝備の進歩……………	一九	滿洲國を包圍する馬蹄陣……………	三九
極東陸海軍の實勢……………	二〇	大國民的襟度を持つべし……………	四一

露國極東戰備を探ぐる

小林 知 治

風雲の満ソ國境

大興安嶺を越えて、ハイラルを過ぎること約二百キロ、そこには滿蒙兩軍の衝突した問題のハルハ廟がある。廣々漠々たる一大草原ではあるが、眞夏ともなれば海拔二千尺の高原にも絢爛眼を奪ふお花畑があり、紺碧のハルハ河の流れを隔て、彼方には外蒙の連山が、丸裸の山腹をむき出して、巍峨としてそびえ立ち、大陸的な雄渾な風景である。牧草を追ふ蒙古人たちは、朝陽と共に起き、夕陽と共に眠る。平和そのものゝ如き生活を楽しんで居るのであるが、滿蒙國境地帯も日ソ兩國の國力の進展と共に、魔擦面が激しくなり、兩軍の衝突のため、青草を血染となす慘事が頻々として惹起するに至つた。

諸君、更らに眼を轉じて、滿洲國の最北端北緯五〇度の大黒河に行つて見給へ。河幅僅か八百メートルの對岸にはソ領ブラゴエシチエンスクがあり、滿ソ兩國は交通杜絶して、蜿蜒八百九十キロの黒龍江が、一衣帶水、王道滿洲國と赤色ロシアを挟んで、にらめっこをしてゐる。時々血腥臭い事件を起して、兩國民の神經を尖がらしてゐる。

「黒龍河畔に夕陽は落ちて、空に冷たい星二つ、何をか奏づる異國の唄が、アムール涉つて、われらの耳に、遊子遙かに故郷想ふ……」

今夏大黒河に遊んだ時、筆者の口からほとばしり出た拙歌であるが、平和なるべき滿ソ兩國が何が故にかくも軋轢が激しくなり、衝突が頻發するに至つたのであらうか。

滿洲事變以來滿ソ國境は屢々緊張を繰り返して來たが、昨年三月の北鐵讓渡交渉成立以來、紛争の禍根がとり除かれ、滿ソ兩國關係は著しく改善され、明朗化した様な印象を受けたのである。が、事實はその反對で、ソ聯邦政府は、北鐵讓渡により、北滿洲より退却はしたが、その代はりに極東駐屯兵力を増加した。滿ソ國境一帯にトーチカと稱する近代式要塞を築いて、「退いて護る」といふやうなゼスチユアを使つてゐるが、いざ戦ひの場合は、守るによし攻めるによしの姿勢である。

怖るべき赤軍の脅威

それがために、滿洲國も必然的に國境の兵備を増加しなくてはならなくなつた。滿ソ兩國はこゝに黒龍江と烏蘇里は挟んで武装對峙の態度を採る事になつた。これがため國境方面における紛争は日増に激増して來た。滿洲國建國以來本年一月に至るまで滿ソ、滿蒙國境紛争事件が二百四十七件あつたに徴しても、如何に軋轢が激しいかがわかるではないか。

最近に至つて兩國の紛争は繁くなつて來た。揚木林子事件、綏芬河北方事件、金廠溝事件、長嶺子事件等は、一體何を物語るものであらうか。滿ソ兩國正規兵の正面衝突による血腥臭い事件は、愈々兩國關係が尖鋭化して來て、國境紛争がやがて戦争にまで擴大されぬと誰が敢えて斷言し得るか。

滿ソ兩國の風雲急にして、日ソは何時戦ふか。このトピックは日滿兩國民の知らんと欲すばかりではなく、世界注目の的である。

赤色ロシアから盛んに經濟建設の烽火が擧がり、軍擴の嵐が捲き起り、國防力の強化はやがて、隣邦滿洲國を侮蔑嘲笑するが如き態度を採らしむるに至つたのみならず、日本を刺戟して

日滿兩國民の神経が昂ぶらすばかりである。

「われらは東西何れの國境においても、戦争の準備は既になつた」と赤軍の幹部が豪語する通り、實際赤軍の軍備は世界有數、否世界隨一であると稱しても差支へない。極東の覇者日本を相手としても、西の強豪ドイツを敵に廻はしても敢えて恐るゝに足らぬと誇稱してゐるのである。

軍備の擴張を主張し、その強化を企圖した赤軍の現状は、誠に怖るべきものがあり、世界赤化の脅威より、むしろその擴充された軍備に威壓された如き感がする、その壓力を感じる國は單に日本のみではないのだ。表面に現はれた赤軍兵力の増加、または國防費の増大は驚嘆に値する。

露都レーニングラード外各主要都市に毎年催される革命記念日或はメーデー等春秋二回に行はれる閱兵式に出動する赤軍の陣容を見よ。或は特別大演習等に表示される赤軍の擴充振りと云ひ、極東滿ソ國境地帯に配置されたる赤軍の堅陣は、實に怖るべきものがある。殊に極東軍の整備充實は、彼等をして、日滿軍怖るに足らずとの侮黨の感を抱かしめ、延いて不法越境、不法射撃等の不遜の態度を採るに至らしめた。

革新途上の赤軍の陣容

ポーランドの獨裁官ピルズスキー元帥から「偉大なる武將」と折紙をつけられたソヴェト國防次官トハチエフスキー元帥は、本年一月十五日モスクワで開かれた中央執行委員會の席上で

「ソヴェト聯邦は極東においては日本、南歐においてはドイツより受くる脅威に對し、東西双方において同時に、國防を充實する必要に迫られた。陸軍に關して編成を變更し、従來正規師團と民兵師團の割合二六%對七四%であつたものを、反對に七七%對二三%たらしめた。又空軍について大なる發達を遂げしめた。海軍も亦潜水艦の發達に力を注ぎ、他の艦種について絶えず擴張せしめ、水上機も増大せしめた結果、今や赤軍の總兵力は百三十萬に達した。」

と論じたので各國軍事當局はアツト吃驚してしまつた。一昨年六十餘萬であつた赤軍が、昨年九十四萬、本年は更らに百三十萬といふ激増振りで、これは獨裁國でなければ出來ない藝當である。もちろん數字上の増加率に比例して内容が果してどの程度まで充實して居るかは、多少の疑問符を附せざるを得ない。

兵員の増加に比例して軍事費の増加も驚歎すべきものがある。一九三三年には僅かに十五億ルーブルであつたのが、三四年になつて一舉に五十億ルーブル、昨年は八十二億ルーブル、本年度には躍進して百五十億ルーブルといふ尪大なる豫算を計上するに至つた。本年末までには、更らに幾何まで軍事費が増加するか、見當もつかない。

軍事豫算と言つてもソ聯の豫算は他國と違ひ豫算面通り支出してゐない。一九三四年度の如き、會計年度の始めに査定せられた軍事費が十八億ルーブルであつたのが、年度末にはいつの間にか五十億ルーブルになつてしまつたといふのだから、トテモたまらない。どこやらの國の如くキリつめた豫算内で軍備の充實、内容の整備を企むのは違ひ、支出お構ひなしといふのだからたいしたものだ。

右の如き軍事費の激増の内容は、昨年度は主として、空軍、装甲隊及化學隊の整備充實に費された。本年度は赤軍兵數の増加とか技術的裝備の擴大、兵營及住宅の増設、政治教育施設等に費されたと公表してゐる。

スターリン政権の下に完全に獨裁化されてゐるのだから、國防豫算の割當、赤軍の擴充等は必要に應じて、何等の躊躇する事なく増加する事が出来るのであるが、但し宣傳好きのソヴェ

ートが何が故に軍費の増加を公表するのか。此點多少の疑問符なきを得ない。

「吠えつく犬は噛みつかない」

といふがソヴェート一流の宣傳は、いまのところ日獨軍と表面衝突を覺悟してからではなく、對內的示威運動と見て大過なからう。最も怖るべき時機は、軍備が完了して、沈黙して來る時代である。この時機が最も怖るべき秋である。

世界の脅威赤軍の特色

「赤軍はソヴェート聯邦の防衛に任ずると共に、その存在の事實を以つて、全世界における被壓迫勤勞民の自由解放に對する闘争を支援する」と言つてゐるが、赤軍の特色は一面同國を防衛する軍隊であると同時に世界革命の強力なる支柱をなす重大使命を帯びて居るのであるから、世界革命の強力なる地盤たる祖國ソヴェートを守れと、第七回コミンテルン大會において彼等は強調してゐる。

けれども現在ソヴェートの青年達は、殊にソヴェート國內でマルキシズムの原理や教育を受けた者たちが、現在の政治機構、政府の施設方針は資本主義國とたいした變化はない。

「どこに世界革命の理想があるか」

と言つて政府を攻撃し、批判する者たちが輩出して來た。そこで政府は

「彼等はトロツキー派の殘齋だ」

と稱してドシ／＼彈壓を加えた、そして更に辨明して曰く

「共産主義はわれ／＼の理想だ。この理想に到達する一つの過程としてわれ／＼は一國社會主義國策をやつてゐるに過ぎない。これが完成すれば更らに進んで共産主義を實行するのである」

と青年たちを色々と宥めにゐる。

現在赤軍の急激なる軍擴に伴ふ最も困難なる問題は、幹部の不足といふ事である。國防次官トハチエフスキーなどが赤軍内における黨員比率の多い事を誇り

「我が赤軍中では黨員及び共産青年同盟員は、四九・三%の多數を占め、指揮官中には、六八・三%の高率である。更らに指揮官中の各階級制を見るに、聯隊長級では黨員七二%、師團長級では九〇%、軍團長級では一〇〇%である」

赤軍の中に黨員の多いのを誇りとして居りながら、それでも幹部の不足はどうする事も出

來ない。そこで下士官、兵卒の中から優秀なものを速成的教育を施して幹部に補充するといふ戦時に近い様な方法を採用してゐる。

赤軍の數字的內容

更らに幹部の人的要素の向上に力癪を入れて居る。從來の如く、士官候補生の如きも健國の精神に鑑み、労働者や貧乏人の子弟を士官學校に入れたが、學術的頭腦のないものは近代戦の指導者とはなり得ない點を顧み、今年から七年級卒業以上のものでなければ採用しないといふ嚴選ぶりである。

ソヴェート兵役制度は國民皆兵主義であり、男子は兵役に服する事を名譽なる權利とし、これに服する事を許されぬ者（非勤勞者、身體に缺陷ある者、宗教上の信念によつて軍務に服せざる者）等は國家的作業、災害救済防止等の事業に賦役せられ、又特別の税金を徵收せられる。服役年限は、十九歳より四十歳までである。

召集前の準備教育を十九、廿歳を二年とし、二年間に二ヶ月の教育を實施する。現役年限を五年とする。正規軍の種類、在營及歸休年限は次の如くである。

赤軍	在營二年	歸休三年
空軍	在營三年	歸休二年
海軍	在營三十四年	歸休二十一年

ゲ・ペ・ウも略海軍と同じである。民兵は現役五年間に歩、砲兵は八ヶ月、騎兵十一ヶ月の召集教育を受けることになつてゐる。豫備役を十五年とし、廿六歳より卅四歳までを第一豫備役、卅五歳より四十歳までを第二豫備役としてゐる。

また平時現有兵力は大體左の如くである。(昭和十一年一月現在)

正規軍、民兵軍、幹部	約七十五萬
民兵軍交代部	約六十萬
ゲ・ペ・ウ軍隊	約十六萬
護送軍隊	約九萬
飛行機	四千機以上
戦車	四千臺以上
機械化兵團	十數個

装甲自動車

千臺以上

世界最大の陸軍と誇示するだけあつて、その内容の充實した事は、到底昔日の帝制時代の比ではない。

機械化兵備の擴大

ソ聯邦の第一次五ヶ年計劃は、赤軍強化の五ヶ年計劃であると言はれて居る程軍需工業の擴大に勢力を集中した。然らば、この赤軍強化の五ヶ年計劃とも言はれた第一次五ヶ年計劃によつて、軍需工業が如何に擴大されたであらうか。軍需工業の中樞をなす機械工業並に化學工業は素晴らしい躍進を見せた。

機械工業及化學工業の躍進に伴ひ、赤軍の機械化、化學化も年一年と面目を一新し、且つ強化されて行つた、毎年催される赤色廣場における分列式を觀ても、次ぎ次ぎに新型の飛行機、タンク、大砲が現はれると共に、化學整備も益々擴大し、防毒設備及毒ガス部隊の面目も刷新された。

軍の機械化とか化學とかについては、ハッキリした數字は軍の機密に屬するから、發表はし

ないが、第十七回黨大會における赤軍首腦者たる國防人民委員長ウオロシロフの報告が大體この刷新振りを物語つてゐる。ソヴェートの空軍は、従前は質においても量においても著しく立遅れてゐた。それが今日では世界一流の空軍國となつてしまつた。ソ國は從來偵察機を主としてゐたのが、現在では積極的に戦闘飛行機の擴大に努力した。その結果戦闘機就中重爆撃機、超重爆撃機が著しく増大した。機數は一九三〇年に約千五百臺であつたのが最近では四千機以上であると言はれてゐる。

タンクはどうかと言ふに、増大刷新の急テンポは實にすさまじい。赤色廣場の分列式に超大型、大型、中型、小型、それから豆型タンク等のいろいろの型のタンクが、何百臺となく、アノ廣場を埋めつくすのであるが、その壯快な事は觀た者でなければわからないと言ふ。ではこのタンクの數は幾何あるかと言ふに四千臺以上であると軍事専門家は言つてゐる。滿蒙國境で日本軍と戦つた時の戦車の操縦も中々巧妙であつたそうである。勇敢なる日本軍によつて破壊された戦車の壁の厚さは、日本軍のそれよりも餘り厚くないとの事だ。歐洲大戰當時怪物戦車の出現は世界の脅威であつたが、將來戦は歩兵の突撃前進を掩護する以外に果してドレ程の重要な役割を演ずるかは疑問である。

砲兵はどうかといふに、帝制時代の軍隊より掠奪繼承したものを主として、これを改善補充して來た。その當時は近代的な型式の砲兵としては、全く問題にならなかつたのである。ところが今日では、車砲、榴彈砲、小口經砲、戦車砲、對戦車砲を始め各種の新型式の砲を完備してゐる、輕機關銃及重機關銃もソ聯國產品によつて異常な發達ぶりを示した。機關銃部隊が歩兵戰鬥力の中心主力をなしてゐる。遭遇戦を得意とする日本軍と要塞戦を得意とするソ聯兵との迫兵戦は、何れに軍扇が擧るかや兩國軍事當局者の多大の興味を以て見て居るところである。「まア、ソ聯兵と四ツの角力をとつても四分六で、我國に少し有利だらう」と、筆者に語つてくれた軍事通があるが、近時ソ聯兵の射撃はトテモうまくなつて來たとの事だ。

ソヴェートの對日策戦

ソヴェート軍事當局が建國の當初から、空軍の發達に重心をおいたことは確かに達眼であつた。現在彼等の航空兵は世界を壓してゐる。蓋し彼等の戦争指導方針によれば、將來戦は第一戦における戰鬥の勝敗によつて戦争の勝敗を決することは出来ない。將來戦は戰場と云ふもの

は單に第一戦ばかりではない。兩國間の全地域が戰場である。故に敵の中心部に擾亂を起さしめ、これを階級闘争に導き、相手國を内部から破壊し、而して是を第一線にまで波及せしむる事が戦争の勝敗を決する捷徑であると信じてゐる。

殷艦遠からず世界大戦でドイツは戰場では絶えず壓倒的勝利を得、敵兵を一步も國內に入らしめなかつたが、背後の革命により擾亂が起り、遂に屈伏の止むなきに至つたのである。

世界的戦術の大家クラウゼヴィッツによれば戦争の目的を達するためには——抵抗力を奪ふためには——敵の戦闘力を壊滅し、再び戦争を繼續する能はざる状態に陥らしむるか、敵の國土を占領し、新たなる戦闘力の發生を彈壓するの何れかの方法によらなければならないと言つてゐる。

従來の戦争では相手方の軍隊や艦隊を撃滅するのが第一の目的であつたが、將來戦においては、單に敵軍の撃滅を期するだけでは充分とは言へない。電氣砲とか飛行機等を以つて、最初から國家の心臓部といふべき政治的、經濟的、軍事的の各中心部を攻撃し、又は敵國民の志氣を挫かしむるため、宣傳や革命勃發を誘導せしめたり、政治的分解を起さしめる等、あらゆる策が企てられるのであらう。

超重爆撃機の空襲

かつてイタリー空軍の花形であつたイタロ・バルボ將軍は、議會で獅子吼して曰く、

「將來戦において何が一番怖るべきであるか。陸軍十ヶ師團を増加し、或は艦隊を現在の二倍乃至三倍に擴張したとしても、國交斷絶に際し國民動員の中心地、大工業の建築物、其他主要道路、港灣設備並に原料資源貯藏地等が大空から爆撃破壊せられたとしたなら果して如何うか。この擴張したる陸海軍が軍事的行動を起す前に、國家の政治經濟の中心地が全滅の悲運に際會したら、戦争の續行は出來ないではないか。……吾人はよろしく機翼を以つて天日を覆ひ爆音を以つて地上の雑音を消す程の大空軍を準備すべきだ」。

好漢バルボ將軍の豫言は將來戦に對する暗示的な好教訓である。ソヴェート當局はこの言を信じて空軍の大擴張を斷行した。ソヴェートの空軍は約四千機、就中、極東空軍の警備中、沿海洲近くに配置した八十有餘の超重爆撃機は千疋の爆彈を抱いて、船艦能力二千五百キロ、悠々と日本の主要都市を空襲し得る優秀機揃ひである。これに比らべて我國の空軍は著しく劣勢であり、防空兵器は國民の熱誠による國防献金でその一部を裝備してゐるに過ぎない現状である

ソヴェートの機材の方面に改善を加へ、その重點は速力の向上において居るやうだ。各機共時速三百キロ、驅逐機は四百キロ以上に標準をおき、機は單葉、低翼、脚は折疊式を賞用してゐるやうである。滿鮮ソ國境方面殊に、ウラジオ、ハバロフスク方面に現はれた飛行機の型は絶えず變化してゐる。新式の驅逐機、新式の超重爆機は時速三百二十キロに増加してゐるとの事だ。ウラジオ、東京間一千一百キロだから、開戦後、三時間半位で東京を空襲出来るわけだ。近代角力は立上るや五分間もかからずして勝負がつくのであるが、將來戦において、開戦劈頭大空軍艦隊が内地主要都市を空襲したとしたなら果して如何か。ソヴェートの空軍怖るべきものがある。

戦車も遂次整備擴張につとめ、飛行機と同じく速力に重點をおき、大體七トン乃至十一トン級の速力の速い優秀車を戦車軍の主體として、これに二トン乃至四トンの輕戦車を備えた装甲機械化部隊を編成してゐる。

宣戦布告と同時に、銀翼を以て天日を覆ふの大空軍と眞黒い地上の怪物戦車が、蟻の密集の如く押し寄せて來たとしたら、蓋しその壯快さは痛絶無比といふべく、その壯列にして慘酷な戦闘も想ひやられるのである。

化學裝備の進歩

化學化裝備を見るに、異常な發達をなした。就中毒ガス部隊の擴大は驚くべきものがあり、消極的な防毒手段も充分に準備してゐる。單に兵卒のみならず、一般市民に對しても行き互つた防毒施設が準備されてゐる。軍用電話、電信、ラヂオの發達は目覺しい。

機械力の使用も非常に増加し、機械操徒には鈍從にして不適當であると言はれた赤軍が、一九二九年二・六馬力であつたのが最近では八馬力以上にも達してゐる、ウオロシローフが豪語して曰く。

「赤軍の兵一人につき馬力は二倍近く増加した。これはフランスやアメリカの陸軍より高い。機械化された英國陸軍をも凌駕するものである」

ソ聯陸軍當局はこの強化された軍隊で、極東における日本軍に對抗せしめてゐるのである。「我が赤軍の前衛隊たる極東赤軍を外敵侵入に備へるため、その軍備を強化した。而して最も重要なる地點に要塞を構築した。敵がそれを越えて我國領上に侵入する事は最早決して容易でない。我國領土はたとへ一ウエルシヨツクと雖も他國に與へない。我々はこれを守り通すば

かりではない。戦争、勃發の際には、必らず勝利者となる確信を持つてゐる」と豪語してゐるのであるから、このウオロシロフの言は單に手先味噌のうぬぼれと聞き流しには出来ない。極東赤軍の充實と言ひ、堅固な要塞と言ひ、實に輕々に看過出来ない。

然らばウオロシロフの豪語する、極東赤軍の現勢はどうか。軍備はどんなものか。勝利の確信と公言するのは如何なる策戦があるのか。

極東陸海軍の實勢

極東陸海軍の實勢を大觀するに、極東ソ聯の赤軍は、極東特別軍編成前は、歩兵三個師、騎兵二個師團であつた。それが一九二九年の露支紛争後一ヶ師を増加した。こゝに極東特別軍が編成され、當時多大の軍功あつたブルツヘルを總司令とし、クラスノヤルスク以東の警備に任じた。

その後滿洲事變と共にシベリア、歐露より兵力を増加し、次第にその強化を圖り、現在において兵力總數約三十萬近くになつてゐる。飛行機九百、戦車八百を數へるに至つた。就中、飛行機の中には超重爆撃機（塔載量 七トン、航続距離二千五百キロ）が整備されてゐる。また

滿洲國の接境地帯、所謂國境地帯には即ち、ボグラニナヤナの東方國境、黒龍江及松花江の、合流地區、ブラゴエ附近の北部國境乃至滿洲里地帯の西方國境には最新式のベトン張りトーチカを築き、鐵條網等を以つて永久的要塞を築いてゐる。

極東赤軍は、陸軍、空軍と同様、歐洲におけるドイツの脅威と極東方面不安の情勢に鑑み、極東方面に獨立の作戰をなし得るやうに海軍の建設を策してゐる。滿洲事變前老朽であつたものが、事變後最近式各艦種を建造移入して、極力その整備充實に當つてゐる。黒龍江を警備に任ずるソ聯江防艦隊を筆者は觀たが中々新式の裝備を施してあつた。

極東艦隊は大體潜水艦約四十隻（一、〇〇〇トン乃至四〇〇トン）、驅逐艦五隻（約八〇〇トン）驅逐艇數十隻（高速度）假裝巡洋艦約十五隻、碎氷艦四隻である。

黒龍江艦隊は、砲艦（大型）十隻（一、〇〇〇トン、一五乃至一二センチ砲數門）（小型）七隻（三五〇乃至二〇〇トン八センチ二門）砲艇 三十隻（三〇乃至一〇トン機銃）

極東及黒龍江艦隊は英米の海軍に比すれば殆んど問題とするに足りないが、極東海軍は飛行機と潜水艦を以つて、日滿兩軍に對抗する策戦であるらしい。

以下極東赤軍の現状を稍々詳細に説明しておこう。

ソ聯の外交政策

極東赤軍の基礎は、だいたい一九二九年の露支紛争の際かためられた。東支鐵道を繞ぐる支那軍との衝突に際し、支那軍をこつびどくやつつけたので多少意氣軒昂たるものがあつた。それが一九三一年の滿洲事變の勃發するや、精銳なる日本軍が破竹の勢ひで北上し、實質上ソ側の管轄する東支鐵道の沿線に殺倒して來た。これが若し張作霖軍が殺倒して來たならたしかに第二の露支紛争が起つたのであらうが、世界無比の日本軍であるから手も足も出ない。況んや當時に於ける極東赤軍は微弱な状態ではどうにもならない。

極東軍司令官ブルツヘルなどが極力對日主戰論を強調したがスターリンは頑として受け入れず局外中立の態度を執るに至つた。然し日本軍の壓倒的大勝となり續いて滿洲國の建設となり、日本の勢力の北上を恐怖する念は愈々強くなり、これが對抗策を腐心するに至つた。尠なくとも日本兵と對抗するだけの兵力の集中の必要を感じ前記極東赤軍三十萬近くの集結となつたのである。それと同時に軍の機械化、化學化を企圖した。

極東赤軍の獨力を以つて日滿兩軍に對抗し得るだけの軍備では満足せず、一朝有事の際歐露

赤軍を極東に輸送出来るやう所謂後顧の憂ひなからしめるために歐露諸國と不可侵條約を締結した。フランス、ポーランド、チエツコスロバキヤ、トルコ、ベルシヤ等と不可侵條約の締結をした。最近數年間のリトヴィノフ外務人民委員長の平和政策はその主要動機は極東の情勢、主として日本軍に備へるための準備工作と見て大過なからう。

「われらは他國の領土を一尺も欲しない。然し我國の領土を一寸と雖も他國に與へない」とスターリンは日本軍の進出に對しソ國側の態度を公表してゐるが、別にこれはソ國側が平和的意思があるわけではなく、對內的に種々の危機があつた事と、未だ準備ならずと見てかこの平和的なゼスチュアを使つたまでである。準備完了したなら平和的假面をかなぐり棄て、帝政時代の猛鷲となつて攻めて來るか、赤色時代の北方の荒熊となつて襲ひ來る事は必然である。

東部國境の配備狀況

極東に集中された赤軍の戰鬥人員は、師團は戰時編成で十二ヶ師團である。その内二ヶ師團が騎兵師團であるが、シベリア鐵道の復線を完成し、更にバイカルの北を迂迴する新線所謂バム鐵道の設定及び最近特に嚴正を極めてゐる交通運輸の全面的刷新によつて、ヨーロッパから

シベリアまで兵力輸送が、益々容易になつて来るであらう。戦争勃發以前に日本の全軍隊に匹敵する三十萬の兵が極東に駐屯し、宣戰布告と同時にそれに數倍する兵力を極東に集中する事が出来るのである。バム鐵道完成の曉はソヴェートの鼻息は愈々荒くなるだらう。

尙この正規兵の外にゲ・ペ・ウの軍隊、軍服や武器を供給されてゐる武装移民が戰時訓練を施されてゐる。これら武装移民を國境附近に移駐せしめ、一般住民を奥地に移轉せしむる政策を執つてゐる。師團の配備と兵力の割當には充分なる注意を拂つてゐる。

これらの兵力の配備状況は大體東部國境、北部國境、西部國境と三分して見る事が出来る。第一はウラジオよりハバロフスクに至る東部國境、第二はブラゴエを中心とする黒龍江に兩翼を張る駐屯軍、第三はチタを中心として、ザバイカル一帯に集結してゐる西部國境であらう。

東部國境は極東司令官にして、シベリアの赤色ナボレオンと驍名を謳はれるブルツヘル元帥の本據たるハバロフスクが中心である。ハバロフスク管下の三個師團がありと觀測せられソ聯の精銳が駐屯してゐる。その他スバスク、ニコリスク並にウラジオに、夫々師團を配置して居る。ウラジオは赤色海軍の根據地だけに、要塞の構築は堅固であり、その監視の嚴重なのは驚くばかりである。

東寧と綏芬河のトーチカ

東部國境でも東寧、綏芬河の國境線は國境監視兵の警戒が嚴重でこの方面ではよく兩國正規兵の衝突が勃發する。「東寧は滿露國境の縮圖である」と言はれる程國境氣分の漂ふ所である。

東寧は人口一萬以上もあつた繁閑な町だつたが今は人口八千に減つたが、最近日本の守備隊が駐屯し、男女日本人が二百人ばかり住んでゐる。

東寧の高地に上つて見ると、小さな眞四角な東寧の町の先きに大烏蛇溝が白蛇のやうに流れて大綏芬河に注いでゐる。對岸正面の河岸から少し離れた處にソ聯の税關跡に駐屯兵がゐる。税關跡の屯所から右に高い高地があるが、この地方では一番高い要害地で、日本側では二百六十九高地と呼んでゐる。左方に二百四十三高地がある。山の中腹の丘陵地にはポルタフカの町が見える。國境線四米以内には何人も入れず、五百メートル以内には軍以外の者は何人も入れず、至るところにトーチカが見える。東寧の正南からハツキリ見えるだけでも、五十のトーチカその他擬裝トーチカ眞物トーチカをつき交ぜると百五十もあるだらう。形は大角、四角形Y字形などである。山上には司令トーチカ、その前方が防禦トーチカ、最前線が戰鬥トーチカと

稱して、それぞれ地下交通路で連絡をとつてゐるの外電信電話で密接な連絡と組織を作つてゐる。司令トーチカなどは立派な二階建て、地上に四メートル出て居り、階上には機關銃、階下には大砲を備え立派な要塞である。地形と云ひ、築城と云ひ實に近代ソヴェートが誇るだけあつて立派なものだ。正面の二百六十九高地より俯瞰すれば東寧などは眼下に見えて、日滿軍の攻撃に地の利を得てゐる。東方國境に限らず大體ソ聯側は地の利を得たところに堅固な要塞を築いてゐる。

粉芬河はボグラニチャナと呼ばれるロシア人が建設した街で、山の斜面には赤煉瓦の家が綺麗に並んでゐる。西部國境の滿洲里と好個の對照をなす國境である、日本側の天長山砲臺から對岸グラテコフ町まで僅々二里餘里、砲臺山、萬壽山などの砲臺から俯瞰出来る。粉芬河驛の左方に守備隊があり、ウラジオまで通ずる鐵道があるので、ソ聯側の守備は堅い。

我が獨立守備隊の勇士たち、鐵の守備、國境の監視、匪賊討伐などで赧顔に三八銃やチエツコの輕機關銃を擔つて、肩で風を切つて意氣揚々と「ボグラニチャナの唄」を歌つて歩くさまは、誠にたのもしい限りである。

風吹く夕べ北滿の

ボグラニチャナ丘に立ち

みをろす平野グロテコフ

ソ聯のトチカほのみゆる……

一朝戰端開始の場合、粉芬河を経て一舉にしてウラジオを衝いて日本軍がこれを占領するか、或はウラジオから超重爆機の百臺近いのか東京を空襲してこれを爆撃灰燼に歸せしむるか、兩國の策戦は速戦速決主義で行はれるであらう。

黒龍江沿岸を探ぐる

北方國境はアムール河を境として滿ソ兩軍相對峙してゐるがその中心地はブラゴエシチエンスクである。この地は軍團司令部があり、兵力は約二萬、高射砲隊、機關銃隊、騎兵部隊、戰車隊その他機械化、化學化兵力を有することは東部國境と同じである。この他ポチカレオとゼーア左岸に夫々兵力を展開して、北部國境を全面的に壓倒してゐる。

滿洲側の大黒河の對岸ブラゴエシチエンスクは河幅僅か八百メートル黒龍江が滔々として流れ、下流のソ領ゼーア河と合流してゐる。赤い家根、白い建物、ソ聯の騎兵聯隊、軍隊の兵舎

が真近に見える。朝は、騎兵などが三々五々黒龍江岸に馬を乗入れ愛馬に水を飲ましたり海水浴をしてゐるのが双眼鏡で見るとよく見える。滿洲國側の大官や、日本軍等の黒河視察に来るときなどはわざわざ國境兵の志氣を鼓舞するため「革命歌」を高唱させる。對岸の黒河には何等の防備もなく案外静まり返つて居るので、ソ聯側では薄氣味悪く思つてゐることであらう。時たま黒龍江を涉つてソ聯に操られる鮮滿露人のスパイが滿領に入りこんで、軍事施設の探索や赤化宣傳を行つてゐる。

西部國境はチタ軍團司令部を中心としてその管下に三個師團ある。ダウリア、ボルチヤ等滿洲里の對照地點及び北方のスレーチエンスクにも夫々師團を配備して用意おさく、怠りはない。殊にこの方面の防備は歐露への關門であるから準備は徹底してゐる。

飛行機の重要根據地

極東赤軍の機械化部隊は先づ戰車の優秀な事である。前述の如く戰車八百臺以上次ぎ次ぎに新型が考案され、その機能も往年のものと比較にならぬ。攻撃力においても速度においても格段の進歩を見せた各種の色とりどりの戰車装甲自動車は爆音を立てながら、白樺の立並ぶシベ

リアの處女地を、怪奇な巨體で踏みじり、黒龍江烏蘇里河を水陸兩用タンクが白波を立て、河馬の如く泳ぎ渡る光景は實に見事な壯快なものである。

大砲や機關銃も面目を一新した。ウラジオその他には著彈距離十哩以上と言はれる電氣自動重砲を始め高射砲、戰車、機關銃も充實し、いざ實戰の場合如何なる新兵器がトビ出すか豫斷を許さぬものがある。

軍用飛行機は特に力瘤を入れてゐるが、廣大なる平野であるから至るところ平原であるから飛行場を得るには便利である。ウラジオから東京空襲往復の出来る重爆が數十機待機の姿勢で毎日猛練習を行つてゐる。メーデーや革命記念日などは五、六十機が蒼空に銀翼を輝かし、滿ソ國境を悠々と飛來して滿洲國側に示威運動をする。

軍用飛行機の重要根據地は、ウラジオオストツクを始め、ニコリス、スパスク、ハバロフスク、ボチカレオ、チタ等を中心として全國に亘つて百ヶ所以上の飛行場が建設されてゐる。

軍用飛行機の外一般旅客機、郵便輸送の航空網も著るしく發達して、その航空路の主要なるものは、イルクーツクからハロフスクを経て、一は南下してウラジオに至るもの、他は北上して北樺太オハからカムチャツカ方面へ伸びるものがあり、更にイルクーツクからヤターツ

クに至るものである。これらの旅客機、輸便機が一朝有事の際は極東空軍の援助をなす事は言ふまでもない。

またオソアピアヒム（ソ聯飛行化學協會）の極東支部をハバロフスクに設置して民間航空の制度を強化したり、空中化學戦に備へるためウラルのスウエルドロフスク（舊稱エカテリンブルグ）近くに化學機械工場を建設した。

化學戦では極東赤軍の化學化に鋭意努力し、毒ガスの研究は頗る盛んであつた。クロール、イルペット等の毒ガス材料は勿論各種の材料を蒐めてゐる。一朝開戦の際は各種の毒ガスが大砲により、飛行機により思ひもかけない處から撒布され投下され、戦鬪を想像以上に慘憺たるものとなすであらう。アメリカから多量に鹽を輸入してゐるのは毒ガスに應用するためである。ソ聯側にセメントを賣つたり鹽を賣ることは、やがてそれが日滿軍を惱ますトーチカとなり、毒ガスとなるのであるから若しもかゝるものを賣らんとする不徳漢があつたなら大いに鼓を鳴らして攻むべしである。

發展途上の極東海軍

極東赤軍の海軍は貧弱であつて堂々日本海軍と對抗出来るものはない。けれど、潜水艦と海軍航空隊により攻撃よりも防備と敵海軍の攪亂を中心としてゐるやうにウオロシロフは言つてゐる「沿海州が（日本から）直接脅威を受けたため我々は極東にも海軍創設の必要に迫られた。然し我國は未だこの極東の若い海軍力を誇る迄にはなつてゐない。我々は海上攻撃手段たる軍艦並に航空母艦を所有してゐない。然しながら我々は陸上におけると同様海上において何人にも對する攻撃をも企圖しない。我々の企圖するところは我國の海岸と國境の守備である。従つて吾々は現有の海軍力主として海軍航空隊と潜水艦によつて、充分外敵の侵入を防止し得る確信を持つてゐる。」

空威張りはソ聯の得意とする處である。陸軍の整備と比較して海軍はそれ程でもないが潜水艦もウラジオには約五十隻を有し、ハバロフスク、ウラジオの各造船所には、目下歐露から分解輸送された潜水艦の組立に多忙を極めて居るとの事だ。大型のは一、〇〇〇トン、中型六〇〇トン、小型は三〇〇トン級である。航空母艦は二隻で、水上機の根據地はウラジオ、ニコラエスク、ハバロフスクの三ヶ所に設けられてゐるとの事だ。

極東における全海軍兵力は一万人以上と見られ、ウラジオを本據として、ハバロフスクは黒

龍江艦隊である。黒龍江艦隊がアムール河の警備に當つてゐるのであつて、多くの砲艦を擁しアムール河制河權を把握せんとしてゐる。

ウラジオ要塞は目下修築補強工事中であるがウラジオの要塞の堅固は世界無比と云はれてゐる。ウラジオを圍む山地は堡壘となつてゐる。この堡壘は、地下道と連絡し、鐵道が敷設してある。地下に兵營があり、倉庫があり、砲臺があり、飛行機があり、飛行場などは、山腹をくりぬいてゐるのであるから、どこから飛行機がトビ出すのかわからない。山腹中の飛行場から出口まで滑先して、山腹を離れた時、既に飛翔出来るやうになつてゐる。日本海軍としては最も注意を拂つてゐるのがウラヂオの潜水艦である。日本海の制海權をこの潜水艦で荒される事は我軍の兵力輸送に一大脅威を與へる事は往年の常陸丸の比ではない。大戰當時ドイツ潜水艦の跳梁を想起すならば、この潜水艦と超重爆の存在は無視出来ない重要な存在であらう。

極東海軍の將來

最近の海軍の擴充は、對獨及び對日を目標として、著々整備を期して居るものであることは明白であるが、本年六月十二日に至つて、對日策を前提とする英ソ海軍妥協案が略々意見の一

致を見、我が海軍當局に相當衝擊を與へて居る事は世間周知の事實である。

和協案の全貌を摘記して見ると、次のやうになつて居るのである。

一、ソ聯政府は最初極東水面に付き、新ロンドン條約の質的制限を一切免除すべきことを要求したが、右要求を撤回して、原則的には極東艦隊に付いても質的制限を受諾することになつたこと

一、これに對して英國政府はソ聯政府の主張を容認して、建艦通報條項は歐洲艦隊のみに適用せず、日本政府が新ロンドン條約の條項を無視する場合には、ソ聯政府は特に通報するを要せず、絶對秘密裡に隨意に建艦することを得ること

この和協方式に依ると、現在日本が正當な要求で新ロンドン條約を無視する態度に出て居る間隙に乗じて、ソ聯極東海軍は軍機を維持しつゝ、太平洋上に於いて日本海軍と拮抗出来ることになつたわけで、英國政府が、日本政府の大陸政策に鑑みて、ソ聯政府の極東防備の特殊權を承認したものと見ることが出来るものだ。

この協定案成立後ソ聯海軍當局では、直ちに三萬五千噸級の主力艦三隻を建造することになつたが、これに依つよ見ても、英ソ兩國の海軍協定の眞の目的は、ソ聯海軍の制限にあるので

はなくて、寧ろこれが擴充策であると見て差支へない。大體英ソ海軍會談は、英、米、佛の三國條約即ち新ロンドン條約にソ聯を加へようといふ目的で開始されたものであり、艦船の量及び、質等の根本問題に付いては今日まで何等の報道も傳へられてゐない。この事實から見ると、この協定は、實質上の制限を主眼とするものではなく、英國が海軍無制限下に曝される明年度以降の對外政策上ソ聯海軍を或る程度に擴張せしめることに依つて、バルチック海においてはなるべき獨逸海軍に拮抗せしめ、極東においては、日本海軍を牽制するために、ソ聯の海軍再建に暗黙の援助を與へることになつたと見るべきである。またソ聯は、明年度を以て第二次五ヶ年計畫を終了する豫定であるが、此計畫に依つて陸軍及び空軍は完全に整備することが出来るが、海軍は潜水艦を除けばたいしたものではない。來るべき第三次五ヶ年言劃においては、専ら海軍再建に努力しなければならぬ。だから、それには英國に指導援助を仰がなければならぬので、従つてかうした事情下に於ける兩國間の協定が、多分にソ聯海軍の擴充援助の性質を帯びることは當然であり、この協定成立後においてソ聯當局が國家統制下の全生産力を總動員して、これが建造に着手するならば、數年経たないうちに三萬五千噸級の主力艦以下の大艦船を保有し得るに至るであらう。

外蒙赤軍の活躍

ソ聯の極東軍備を觀察するに際し、外蒙軍の實勢力を等閑に出来ない。外蒙にある赤軍の總兵力は約五十師團と目され、その全力はサンベース方面よりポイルノールを貫き問題の起つたハルハ河からソロン一帯に亘つてゐる。

首都クローンは軍備の中心をなし、兵力約二萬多數の砲、高射砲、輕機タンク、装甲自動車を持ち、空軍は飛行機、重爆、偵察機など數百機ある。サンベースには赤軍の全力が集中され、大飛行場には百臺以上の軍用機が備へられてゐる。ケルユルン河岸にも兵力が集中され赤軍に指導されつゝあつた蒙古軍約十萬人で、是等外蒙軍が一度び日ソ開戦の場合、有力なる遊撃軍となり、西部戦線の牽制に出る事は明らかである。

外蒙は既にソ聯の一戦争單位となつてゐる。外蒙の軍隊は、純然たるソ軍である。

去る三月二十一日、外蒙の軍用飛行機十二機が越境飛來して日滿軍に爆撃を加へた傍若無人に行爲は太く我國民を刺戟したものだ。

この種の事件は従來も屢々行はれてゐたことであるが、最近は益々國境深く入り込み、やり

方も大袈裟で大膽になつて來た。このやうに挑戰的になつて來たことは、ソ軍に充分な軍備が整備された結果であるとするべきである。

この事件よりも一層重大な關心を以て觀られるのは、これよりさきソ聯が外蒙と相互援助條約を公表（三月十二日）した事實である。これはソ聯と外蒙との相互援助條約は、ソ聯が最も苦手としてゐる。日滿議定書に對抗するもので、この條約によつて外蒙はソ聯の一聯邦として保護國化してしまつた。従つてソ聯は今後、専ら裏面工作をなしてゐた今日までの態度を一擲して、公然とその内政に容喙することとなつた。一方條約に藉口してソ聯は、陸、空の大軍を外蒙に進駐させ、滿蒙國境に集結して、日滿軍に對抗させてゐるので、日滿軍ソ軍との對抗面が一層擴大されたのである。

滿洲國は今日まで陸地に於てソ聯と約六百六十マイルの國境を接し、河川を境として約千三百二十マイルを接してゐたが、この露蒙條約によつて事實上今後はさらに四百二十マイルの陸地國境を加へねばならぬこととなつた。日ソ兩軍の磨擦面はますます擴大されたわけだ。

更にソ聯側は蒙古に兵力と裝備の擴大強化するのみならず、第一線の兵士たちに日滿軍怖るるに足らず、日本には飛行機は一臺もないなどと教へ込み、必勝の精神を鼓吹してゐる。

これは單に外蒙兵のみではない。ソ聯國內人民にも、機會ある毎に日本怖るに足らないと宣傳し、メーデーや革命記念日には機械化兵團、化學化兵團は勿論、空軍の大デモンストレーションを行つて精銳なる兵器を誇示することを忘れない。

「若し極東に事變が起つたなら、一兵卒より指揮官に至るまで、一團となつて徹底的に打撃を與へ、以て外敵に應酬するであらう。」

とスタリースは豪語してゐる。

戰略的見地から觀た外蒙軍の存在はかなり重要な役割を果たすであらう。

日ソ戦の場合蒙古の戰略的價値が如何に重大であるかは、支那邊境研究の權威者たるオーエン・ラティモア氏が、日滿、ソ蒙の對立關係における外蒙の戰略的地位につき説いてゐる。今左にその大要を概記する。暗示的且つ事實に近い論旨であらう。

「ロシアと日本との間に戦端が開かれた場合におけるシベリア滿洲國間國境の戰略的價値は、當然兩國境に熟知されてゐる。鐵道哩數も知られて居るし、又兩國民が動員し得る兵力も、その軍事行動を開始しむるに要する時間も、大體誤りなく計算することが出来る。ソ聯がウラジオストツクの根據地から、大阪や東京を空襲することの可能性を日本は考慮の中に入れ、か

る攻撃の効果を減殺せしむるべく何等かの方法を採ることは明らかである。

他方日本がウラジオストクと沿海州を占領すれば、ソ聯を屠り得るだらうとの考へは、皮相である。なんとならば、國境における敗戦は兩國にとつて、それは單なる後退にすぎず、兩者の基礎的關係を根本的に變化するものでないからだ。これも一九〇四、五年の日露戦争が決定的結果に終らなかつた所以であつて、結局は、日露戦争は兩國衝突劇の第一幕であつたのである。

然らば兩國の全面的な決定的な行動に出で得る唯一の地域は、シベリア外蒙方面と滿洲國內の内蒙方面である。ウラジオとウスリー、黒龍江國境の作戦は、局部的であり、戰略的考慮の餘地を残すものである。地域は廣大であり、シベリア横斷鐵道は、これに沿ふて走り、滿洲の諸鐵道は何れも行く手にこの地域を指し、且つ行動の範圍が、蜿蜒數百哩に達する。この地は蒙古としては、支那、シベリア、若くは滿洲國に比し、一般に知らるゝ處がすくないにも拘らず、全極東の運命を決する鍵と言はねばなるまい。」

赤化外蒙古の政治的地位は、ソヴェイトが國是とする世界赤色革命政策の根據地である。故にソ聯が外蒙古を支配し、強化し、これを煽動する限り、東亞の平和と幸福とは到底招來されなう。

滿洲國を包圍する馬蹄陣

以上で大體ソ聯極東戰備の極く簡單なアウトラインだけを説明し得たと思ふ。さて、友邦滿洲國は今や全く赤軍によつて包圍されてゐる優勢なるソ聯の軍隊によつて三方から壓迫されてゐるのだ。即ち南方は支那共産軍を使喚して、日本軍の北支進出を壓迫せしめ、西方は外蒙赤軍を操り、國境を脅かし、東方と北部は沿海州、黒龍江、ザバイカルにかけて精銳を誇るソ聯の軍隊が待機の姿勢で日滿軍を睨んでゐる。四方八方殆んどソヴェイトの馬蹄型の如く包圍され壓迫されてゐる。勿論この包圍陣はモスクワ本部の指揮の下になされてゐるものである。

北滿に、外蒙に、北支に伸びんとする膨脹日本の勢力を阻止せんとして、堅く陣を張りめぐらすばかりではない。後方より思想混亂を起さしめ、共産思想の鼓吹に大童の活動である。四面楚歌と言ふ言葉は文字通り四面蘇歌と訂正しても差支へない。なんとならば、滿洲國境を繞ぐるソ聯の監視兵、守備兵たちは朝夕革命歌の蘇歌を高唱して日滿軍に對峙してゐるからだ。

吾人は徒らに戰を欲して、心よしとするものでない。武は武を止むるを最上とする。武門の

誇は名譽ある平和である。孫士は曰ふ。「百戰百勝は善の善なるものでない。戦はずして兵を屈するは、善の善なるものである」と。吳子は曰ふ。「良將はは戦ずして勝つ」と。日本はソ聯の極東軍備に對抗して是れと一戦を交へんとする意思は毫末もない。日本はソ聯の有する極東軍隊を屏見せしむるためには、是れに勝るとも劣らざる軍備を充實して、無言の中に壓力を感じしめ、ソ軍を極東から撤退さしむるか、無力ならしむるのでなければ、到底新興滿洲國の成長發展を望む事は出来ない。何よりも先づ來らざるを待たず、待つあるを待むの實力を準備すべきだ。簡約すれば在滿兵力の充實が焦眉の急である。國防の強化は、他國の嘲笑を防ぎ、無言の壓力を感じしめ、戦争を防止すを唯一の手段である。

ただ、強き人格のみが歴史に耐ふ。弱者はその下に粉碎さる」と哲人ニイチエは喝破する。二十世紀における日本民族の發展を考へ、日本の世界發使命の重大さを想ふ者は、外部の壓力により焦燥を感じ、苦慮する事なく、ただ實力を養ふべきだ。無言の中に、微笑を以つて、堂々世界を濶歩するの實力を養ふべきだ。

大國民的襟度を持つべし

たたかひは創造の父、文化の母である。

國防は國家生成發展の活力である。

われ／＼の言ふたたかひは、人類の相剋、國家相食むのたたかひではない。

民族の生存權を主張し、國際正義の追求し、世界平和を阻害する霸道を抑止するのたたかひである。蕩々坦々たる皇道を世界に宣布せんとするのが皇軍の負擔すべき重責である。

この意味において日本は挑戦されない限り、斷じてソ軍に對して戦端を開くものではない。日本の「たたかひ」は常に理不盡に挑戦された時、皇道が阻害された時始めて必死必殺の聖劍を執つたのである。我が國政府並に軍當局は機會ある毎にこの點を世界に向つて語つて來た。ソ戰當局並に一般民衆に日本に對する猜疑と不信の念を一掃せしめると同時に、日本は不法なる侵略行爲に對して斷乎たる手段に出づる事を相手をして知らしむる事が必要だ。

「滿洲國とソ軍の國境紛争は、日ソ兩國の紛争の焦點となり、日ソ兩國衝突の導火線とならうとしてゐる。滿ソ國境は蜿蜒數千哩に亘つてゐる。兩國の戦機はまさに一觸即發の情勢にある」といふ觀測は、ただに歐米人のみならず、日、滿、蘇、支人の考へてゐるところである。

われ／＼はよろしく大國民的襟度を持ち、滿ソ國境の小衝突に神經を尖らして興奮すべきで

はない。勿論、國境問題は輕視すべきではないが、眼界を擴大してよろしく大乘的見地に立つて、世界の大勢を直視すべきだ。

ソ軍は如何なる國體であるとも世界の大國である。ソ軍の大軍備を想ひ、コーカサスの無盡藏の石油と石炭、東西に跨る廣大なる領土を抱いてゐることを思へば、日ソの再戦が世界大戦にも増して慘憺たるものであることは素人でも想像し得る處である。

等しくラテン民族でありながら、佛伊の抗争は、如何に英露の歡迎する所であるかを思ひ見よ。

アジアにおける日支の衝突はいかに英米の喜ぶ所であるに想ひ看よ！

日ソ相争ふ事によつて最大の利益を得るものは、世界の現状を維持せんとす歐米諸國、特にアングロサクソン民族である。國際政治の舞臺に踊る老獪英國の策謀はいかに日ソ相戦はしめんとして苦心してゐるか。富源を誇る米國と雖も内心如何に日ソ衝突を希望してゐるか。隣邦支那が日ソ再戦の場合如何なる態度に出でんとするかは、少しく國際政治に一隻眼を有する者の既に承知の事であらうと思ふ。

目前に展開する現象に興奮して、多大な犠牲を拂はしむる如き者とは、共に國家百年の大計

は語るべからずだ。英米露支一觸即發の情勢に慷慨悲憤、一舉戦争により解決せんとして、徒らに國際的漁夫を利せしむるは、思慮ある大和民族の斷じて採るべき策ではない。

然らば眼前の事實として、日滿を包圍する極東ソ軍の大軍備を如何にすべきであるか。これが解決策は口頭外交や、應接間の接衝では到底解決出来ない。太陽の恩惠の薄い斯拉ヴ民族をして、近東なり中央アジアへ暖き海を興へるの暗黙の諒解とか、無言の示教を興へて極東侵略を斷念せしむるのもその一策であらう。然らざれば、彼をして壓倒せしむるだけの日本の在滿兵力を強固にして彼をして沈黙せし、畏敬せしめ、極東に志を絶たしむるの策を採るべきである。

戦争防衛の捷徑は國防の充實にある。多額な軍費も戦争防衛の保険料と思へば安いものである。近時北滿における日ソ風雲の危機が叫ばれ、ソ軍の不法越境、不法射撃の頻發は一に日ソ軍備の不均衡から發するのである。在滿兵力の充實は刻下焦眉の急務であると言はねばなるまい。重ねて言ふ。武は武を止むるを最上とする。さりながら武門の誇は名譽ある平和でなければならぬ。

街の人氣者小ばなし

金拾錢
送料二錢

街頭に於て話や噂に上る人々の社會的時代的の力といふものは、決して見逃すことが出來ない。この意味に於てこうした人々の「小ばなし」を公表して、生きた人生哲學を世に問ふ次第。秘話・珍話・噂……のカクテル！

街のアナウンサー
松下 浩

述【再版】

政道社發行

振替東京七七三四六番

野間清治と

藤原銀次郎

金拾錢

送料二錢

野間清治と藤原銀次郎！ 何んと好箇の對象ではないか。一人は、紙の消費者にして、一人は紙の供給者。そして二人共にその満腹の覆氣を以て遂に今日を築いた我國稀に見る奮闘兒。二人の今日我國否世界に占むるの地位は全く特殊の存在と云つてよからう。全卷悉く血湧き肉躍るの快心の名著！

百々牧三先生著【再版】

政道社發行

後記

近時滿蘇國境の紛争が激しくなり、ソヴェート正規軍と日滿軍との衝突が、不法越境不法射撃等のニュースとなつて傳はり、日滿兩國民の神經を尖がらして居ります。また、滿蒙國境では、不法拉致問題、通蘇問題の不祥事が勃發して、血腥臭い事件を惹起して居ります。一體滿蘇國境問題はなせもかく紛争が起るのでせうか將又、日蘇國境の風雲はなせもかく急迫したのでせうか世界の輿論は、日蘇戦争の危機を叫び、極東の大戦を豫想して居ります。

本誌は茲に新進軍事評論家小林知治先生に委囑して、二ヶ月に亘る滿蒙國境實地調査に基き滿蘇國境の現状と露國極東軍備の内狀を詳細に説明して頂きました。本書は恐らく大方讀者諸賢の興味と期待に添ふべきものとの自信を以て、茲に多額の費用を顧みず公刊したものです。本社の出版物も増版又増版を重ね讀者諸君の好評を博して居ります。愛讀者諸君の御希望の點がありましたら何卒、ドシドシ御注意下さいませ。

(露國極東戰備を採る) 定價拾錢 送料二錢

昭和十一年七月十五日印刷
昭和十一年七月廿三日發行

著者 小林知治

發行人 鈴木芳太郎

印刷所 東京市四谷區本村町四番地

印刷所 東京市四谷區本村町四番地

印刷所 東京市豊島區雜司ヶ

谷町一丁目一番地

發行所 政道社

振替東京七三三四六番

各驛一ム立賣

發賣所
東京市麴町區有樂町二ノ二 森田書房
東京市京橋區西銀座二ノ三 鐵道保養會
東京市下谷區上野町一ノ二 鐵道弘濟會
大阪市北區堂島二丁目二五 新正堂書店

北支に躍る人々

金十錢
送料二錢

北支の風雲は今後如何に轉回されるか？ 謎の國の現在及將來について何人にも判り易く、人物を中心として詳述してあります、新政權を牛耳る人々、人氣男宋哲元、猛將韓復榘、智謀の士商震、遊星傅作義等次から次へと登場して息をもつかせず讀破せしむる筆致に接せられよ！

小林知治先生の快著
再版増刷出來

政道社發行

東京七三三六番
電話二九〇六番